

ニッポンハム食の未来財団 2024 年度第一期 団体活動支援助成 完了報告書

企画活動名	第 7 回小児アレルギースキルアップコース (Pediatric Allergy Skill Up Course, PASCO 2024)
フリガナ	フクイエ タツキ
申請者（代表者）氏名	福家 辰樹
団体名（正式名称）	団体名：一般社団法人 日本小児アレルギー学会 申請者の役職・肩書など：日本小児アレルギー学会理事、同学会小児アレルギー教育セミナーワーキンググループ委員長

### 1. 活動結果要約

本邦では、小児アレルギー診療に精通した専門医は十分でなく地域格差も大きい。日本小児アレルギー学会は小児アレルギー専門医の育成、一般小児科医の総合的なアレルギー診療のレベル向上及び均てん化推進を目指し、小児アレルギー教育セミナーワーキンググループを立ち上げ、若手医師の教育と診療支援および効果測定を目的とする研修プログラム「小児アレルギースキルアップコース：Pediatric Allergy Skill-up Course, PASCO」を開発した。

今回、ニッポンハム食の未来財団の助成を賜り、第 7 回小児アレルギースキルアップコース (PASCO 2024) を 2024 年 9 月 14・15 日に開催し、卒後 15 年目までの小児科医師 56 名が参加した。食物アレルギー・気管支喘息・アトピー性皮膚炎についてアクティブラーニングを用いたセッションをおこない、活発な議論がなされ、参加者同士やチューター（アレルギー専門医）との新たな交流も生まれた。コース後のアンケートではコースに対する参加者満足度・学習到達度とも 9 割に達し、多くの参加者において半年後の行動変容も認めた。PASCO2024 を通し、全国の若手小児科医に小児アレルギー診療に関する標準的かつ適切な診療技術を身につけてもらうことができた。今後も、小児アレルギー疾患における地域診療レベルの底上げ、小児の健康増進への寄与を目的に本活動を継続する予定である。

## 2. 活動目的

我が国の人口の半数は何らかのアレルギー疾患に罹患しているとされ、国はアレルギー疾患対策基本法を施行しその対策を進めている。特に食物アレルギーにおいては、3歳までに診断される児は14.9%などと報告され現在も重大な健康問題の1つである。近年、発症リスクや予防法に関して重要な知見が次々と報告され、アトピー性皮膚炎の早期治療や離乳食の早期開始などにより食物アレルギーの大幅な減少が期待でき、かつて「予防」につながることを期待し指導された情報の中には、かえって逆効果となり食物アレルギーを発症しやすくするものもあることが明らかになった。治療・管理においては、食物経口負荷試験等の正しい診断に基づいた「必要最小限の除去（安全な範囲の摂取）」を指導する事で予後改善が期待できることが明らかになった。また、致死性的アナフィラキシーを来す症例には治療不十分な気管支喘息患者が多くを占めることから、食物アレルギー診療を適切に実施し、早期に寛解させ予後改善を促すためには食物経口負荷試験は勿論のこと、アトピー性皮膚炎や気管支喘息を含めた総合的な診療技術、つまり Total Allergist としての技能が必須である。

一方、アレルギー診療に精通した専門医の数は未だ十分とは言えず、さらに地域格差も大きく、小児アレルギー診療が均てん化されたとは言い難い状況である。そこで日本小児アレルギー学会では小児アレルギー専門医の育成と一般小児科医の総合的なアレルギー診療のレベル向上および均てん化推進を目指し、小児アレルギー教育セミナーワーキンググループを立ち上げ、若手医師の教育と診療支援および効果測定を目的とする研修プログラム「小児アレルギースキルアップコース：Pediatric Allergy Skill-up Course, PASC0」を開発した。

この小児アレルギースキルアップコース（PASC0）を通し、小児アレルギー診療に関する最新のエビデンスに基づいた標準的かつ適切な診療技術を全国の若手小児科医に身につけてもらうと共に、最前線で活躍するアレルギー専門医と濃密に接することでその臨床的・学術的な面白さを体験し、最終的に小児アレルギー疾患に対する地域診療レベルの底上げ、人材育成、小児の健康増進への寄与を本活動の目的とする。

## 3. 活動方法

第7回小児アレルギースキルアップコース（PASC02024）について、当初の計画通りに、以下の内容で準備がなされ、コースが開催された。

<スケジュール>

2024年4月

- ・コース内容骨子の検討（主要メンバー）
- ・企業共催セミナー内容の検討（主要メンバー）
- ・チューターの決定

5月

- ・コース内容の決定（主要メンバー）

6月

- ・関連HPやメールリングリストを通じた参加者募集（～7月）
- ・コース資料の作成・打ち合わせ（主要メンバー・チューター）

8月

- ・コース資料の完成・印刷、物品準備（主要メンバー・チューター）
- ・参加者に対するWEBアンケート①（コース開催前）の実施

9月

- ・9月14・15日 第7回小児アレルギースキルアップコース（PASC0 2024）開催  
（主要メンバー・チューター）
- ・参加者に対するWEBアンケート②（コース開催直後）の実施

11月

- ・日本小児アレルギー学会総会での活動報告（主要メンバー）

2025年3月

- ・参加者に対するWEBアンケート③（コース開催から半年後）の実施

<第7回小児アレルギースキルアップコース（PASC02024）開催概要>（添付資料1）

1. 会議名称 第7回小児アレルギースキルアップコース（PASC0 2024）

2. 会期 2024年9月14日（土）・15日（日）

3. 会場 新梅田研修センター（大阪府大阪市福島区福島6丁目22-20）

4. 役割

委員長：福家 辰樹（国立成育医療研究センターアレルギーセンター総合アレルギー科診療部長）

実行委員長：伊藤 靖典（長野県立こども病院小児アレルギーセンター長）

チューター：22名（日本小児アレルギー学会に所属する全国のアレルギー専門医）

5. 参加対象者・人数

小児アレルギー診療のスキルアップを目指す若手小児科医（卒後15年以下、日本小児アレルギー学会員以外も可）56名

6. 開催形式 宿泊研修施設を利用した現地対面形式（講義・ハンズオン）

7. 開催内容

■ ハンズオンセミナー（各セッション：90分）

参加者は1グループ6名ずつの小グループ制でローテーションし、それぞれにファシリテーター1名とチューター2名が付き添い、食物アレルギー・気管支喘息・アトピー性皮膚炎といった小児期の代表的な各アレルギー疾患についてアクティブラーニングをおこなった。模擬症例のシナリオを用いた診療体験に加え、臨床現場で必須となる手技について実践的な実習を行い、セッションの終わりにはグループ内での質疑応答の時間を設け、参加者の疑問が解決するよう努めた。

1) 食物アレルギー

アレルギー検査の選び方や解釈、特異的 IgE 抗体や皮膚テストの考え方、食物経口負荷試験プラン、緊急時対応の指導ハンズオン：皮膚テスト、エピペンの使用方法

## 2) 気管支喘息

重症度の評価、長期管理法、吸入指導、呼吸機能検査の実施・理解

ハンズオン：スパイロメトリー、呼気 NO 濃度測定、吸入指導

## 3) アトピー性皮膚炎

重症度の評価、外用剤の処方・スキンケア指導、プロアクティブ療法の実際

ハンズオン：スキンケア、外用剤の塗布方法

### ■ 講義（各疾患に関する講演、共催セミナー 他）

食物アレルギー、気管支喘息、アトピー性皮膚炎について、ハンズオンセミナーでカバーされない点に関してさらに知識を深めるべく講義をおこなった。アレルギー性鼻炎・舌下免疫療法も内容に含めた。

また、Meet the Expert と題して、PASCO 立ち上げ時からご尽力いただいていた先生方から、若手医師への激励と共に、アトピー性皮膚炎の治療の変遷、適切な吸入療法の重要性についてそれぞれご講演いただいた。

### ■ グループディスカッション

夕食の時間を使い、アレルギー疾患における診療上の疑問や、キャリアアップの方法など日頃の悩みについて参加者がアレルギー専門医とディスカッションできる、症例検討・意見交換会を設けた。

### ■ 研修評価

コース開催の前後で、教育評価法である Kirkpatrick の 4 段階評価モデルにより、参加者に対し知識と手技等に関するアンケートを行った。さらに、コースから半年後にどのような行動変容があったのか調査し、合わせて本会の研修効果に関する評価を実施した。

#### 4. 結果及び波及効果

第7回小児アレルギースキルアップコース（PASC02024）には、卒後15年目以下の小児科医師56名が参加し、日本小児アレルギー学会からチューター22名の協力を得た。参加者の性別は男性・女性が半数ずつ、医師年数の中央値は6年（範囲 3-14年）、勤務形態は勤務医が54名（96.4%）、開業医が2名（3.6%）だった。勤務先に相談できるアレルギー専門医・指導医が不在であると回答したものは25名（44.6%）であった。

ハンズオンセミナーの各セッションでは、参加者が普段の診療での疑問点をチューターにぶつけるなど、活発な質疑応答がなされた。立食形式の懇親会に併せて実施した症例検討・意見交換会でも、花粉・食物アレルギー症候群など参加者が普段の診療で出会うような事例をテーマにしながら参加者とチューターが自由な雰囲気でも活発にディスカッションをおこなう様子がみられた。また、各セッションのディスカッションや意見交換会では、参加者からキャリアにおける相談などもなされ、参加者同士やチューターとの新たな交流が生まれた。

本コースでは、参加者アンケートをコース前・直後・半年後の3回実施し、教育評価法であるKirkpatrickの4段階評価モデルにより研修効果に関する評価を実施した。アンケートの回答数は、コース前56名（100%）、直後44名（78.6%）、半年後28名（50.0%）であった。

##### ■参加者満足度

コース直後のアンケートにて、参加者満足度を評価した。「到達目標の項目は、自分のニーズに対して適切であった」と回答したものは43名（97.7%）、「模擬症例を使つての実演学習は有用であった」と回答したものは44名（100%）、「今回の研修は自分のライフプランに影響を与えた」と回答したものは41名（93.2%）であり、ほとんどの参加者にとって本コースの満足度が高かったことが示された。（図1・2）

図1. コースの内容・量 直後アンケート (n=44)

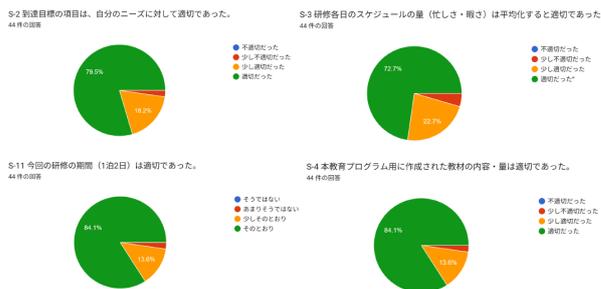
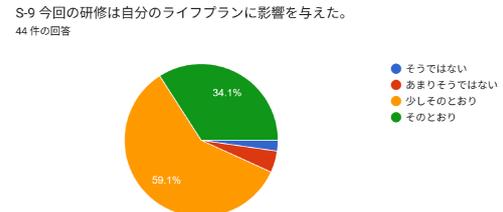


図2. 自身のライフプランへの影響 直後アンケート (n=44)



## ■学習到達度

コース前と直後のアンケートを比較し、知識・技術の習得を評価した。

食物アレルギー、気管支喘息、アトピー性皮膚炎のいずれの知識・技術についても、コース前と比較し事後アンケートでは習得できたものが増え、いずれも9割以上であった。なかでも、「プリックテストを正しく行うことができる」「アトピー性皮膚炎の重症度を評価することができる」「即時型反応誘発の可能性が低い食品の制限解除をする場合の、患者への注意事項を挙げることができる」「少量の負荷試験で陰性であった場合の制限食品の解除について、患者毎に方針を決定できる」「フローボリューム曲線の測定を正しく行うことができる」「呼吸機能検査の結果について、患者（保護者）に説明ができる」については事前の習得が4割程度であったものの、事後の習得が9割以上に増加しており、各セッションにおけるハンズオンの有効性が示唆された。

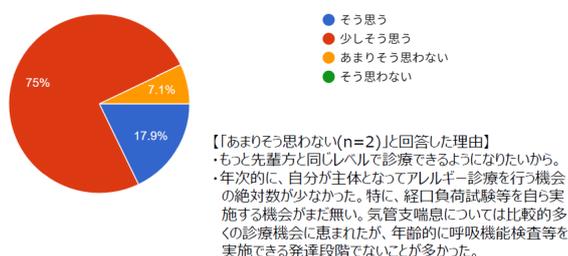
## ■行動変容

コース前と半年後のアンケートを比較し、参加者の普段の診療での実践、行動変容を評価した。

「小児アレルギー診療が自ら期待したレベルに到達した」と回答したものは24名（92.3%）であった。（図3）

図3. 半年後の自身の到達度 半年後アンケート (n=28)

A-16. 小児アレルギーの診療が自ら期待したレベルに到達していると思いますか。  
28件の回答



行動変容に関する 15 項目の質問の全てにおいて、コース前と比較し半年後では、普段の診療で実践している割合が増加していた。多くの項目で、半年後の回答者の 8 割以上が実践しているという結果であったが、「アレルギー症状の原因として疑わしいアレルゲンが、特異的 IgE 抗体検査項目に含まれない場合は、5 割以上の患者に対してプリックテスト実施を考慮している（抗原の準備や入手方法について考える等）」「アトピー性皮膚炎で初めて受診した患者の診療機会があったとき、8 割以上の患者について、重症度の評価をしている」「食物アレルギーのために初めて受診した患者の診療機会があったとき、5 割以上の患者に対して、食物経口負荷試験を実施している」「気管支喘息で長期管理中の患者の診療機会があったとき、5 割以上の患者に対して、呼吸機能検査を行っている」については 4 - 6 割程度の実践であり、プリックテスト、食物経口負荷試験、アトピー性皮膚炎の重症度評価、喘息に対する呼吸機能検査については実践に対するハードルが高いことが示された。一方で、参加者の自由記載からは、勤務先の病院でそれらの検査をできる環境ではないこと、まだ若手であり自分が主体でアレルギー診療を行う機会の絶対数が少なかったことなども理由として考えられた。

## 5. 今後の活動について

本コースを通じ、全国の若手小児科医のアレルギー診療に関する知識技術の向上・行動変容につなげることができた。また、本コースの参加には全国から定員を超える申し込みがあり、需要の高さが伺えた。

今後も本コース（年 1 回）の開催を計画しており、小児アレルギー診療に精通した医師の増加、地域での小児アレルギー診療の底上げ・均てん化、小児の健康増進に寄与していきたいと考えている。

以上